

令和4年度 総務文教委員会行政視察報告書

総務文教委員会
委員長 松井 邦人

1 視察期間 令和4年11月21日(月)

2 視察先及び視察事項

(1) 富山県防災危機管理センター

・県における防災・危機管理体制について

(2) 富山市立八尾中学校

・統合中学校について

3 視察参加委員

委員長	松井	邦人
副委員長	田辺	裕三
委員	金岡	貴裕
〃	松尾	茂
〃	尾上	一彦
〃	村石	篤
〃	鋪田	博紀
〃	高田	重信
〃	赤星	ゆかり
〃	柞山	数男

4 随行職員

議事調査課長代理	中山 崇
議事調査課主任	竹之内 慧

5 視察概要

富山県防災危機管理センター

(1) 視察事項

- ・県における防災・危機管理体制について

(2) 視察の目的

本市では、安心・安全なまちづくりを推進するに当たり、様々な危機事象等への対応強化を図るために様々な取組が行われているが、実際に大規模な災害等が発生した場合には、県と市町村が連携して災害の拡大防止や被災者の救護に努め、被害を最小限にとどめる必要がある。

県において、災害等の非常時に迅速かつ的確に対応できるよう、常設の災害対策本部室や関係機関等が活動するためのスペースを備えた富山県防災危機管理センターが整備された。本施設の機能や設備について視察し、災害等発生時の県と市町村の連携について理解を深めるものである。

(3) 取組の概要

本年10月から運用されている富山県防災危機管理センターは、建設面積約1,393平方メートル、延べ床面積約10,465平方メートルの地上10階建てで、本県の防災・危機管理の機能を有する拠点施設である。

1階には、交流・展示ホールがあり、防災意識の啓発を図るための映像やパネル等が展示されている。2階には、災害時にプレスルームとして利用する中会議室と県庁内保育所が設置されている。3階には、災害時に各関係機関が業務を行う執務室が設けられている。4階には、災害対策本部室が常設されており、危機管理局の執務室が併設されている。5階には、災害対策本部員会議室があり、災害発生時には富山県知事を本部長とした災害対策本部が協議する場となる。6階から9階は土木部等の執務室や災害時に国の機関等の執務室となる会議室がある。10階には、備蓄倉庫や非常用発電機室などがある。備蓄倉庫には、災害対応に当たる職員の3日分の食料や飲料水などが備蓄されている。屋上にはヘリポートが設置されており、災害時の参集や資機材の搬入等に利用される。

さらに、立山連峰や松川べりの桜を眺望できるテラスの整備や会議室等の一般利用者への貸出しなど、県民のにぎわいの場としての側面も備えている。

(4) 所感

〔松井委員長〕

富山県防災危機管理センターは、県内で災害等が発生した非常時に迅速かつ的確に被災状況の情報収集や対策立案を行うために建設され、県内各地に設置してあるカメラで状況を把握できるようになっていた。

災害が発生した際には災害対策本部やオペレーションルーム、関係機関等が応急対策業務を行う部屋、プレスルームなどとして活用し、ふだんは県民が活用できる会議室や研修室として利用できるようになっていた。

富山市は、万が一災害が発生したときに備えて、この防災危機管理センターと緊密に連携できるようにする必要があると感じた。

〔田辺副委員長〕

現地の被災映像などをリアルタイムで表示できる映像情報システムなど、最新のテクノロジーを駆使したすばらしい施設に感動した。今後、富山県防災危機管理センターにおいては、県と各市町村が災害時の運用方法を協議し、連携しながら、災害に強いまちづくりの中心的機能を発揮されるものと期待している。

〔金岡委員〕

富山県防災危機管理センターでは常設の災害対策本部室、本部員会議室、自衛隊等広域応援部隊のスペース、屋上ヘリポート等の見学、また、耐震性と耐浸水性の確保について説明していただいた。何か不測の事態が起きたときでも、盤石の施設であると感じた。会議システムについても、連携が図りやすくなっていて、危機管理に限らず、市町村や他県との会議がしやすくなっていると感じた。今後の本市との連携にも期待が持てた。

〔松尾委員〕

富山県防災危機管理センターは、災害等の非常時における県民の生命を守るための拠点施設である。常設の災害対策本部室や防災関係機関が活動するためのスペースを見学し、被災状況の情報収集や、関係機関や応援部隊等と連携し迅速に対策を実施する拠点として、重要な役割を担っていることを確認した。施設内には研修室や交流・展示ホールもあり、防災意識の啓発にもなる。これから様々な訓練の積み重ねが重要であると感じた。また、あらゆる事態を想定し富山県の災害対策に努めていく必要があると感じた。

〔尾上委員〕

この類の施設では当然のことだが、立地する場所の様々な条件（浸水想定水位など）を考慮して建設されており、万が一の災害発生時でも運用可能と感じた。しかし、本庁舎と同じ敷地での建設を優先したためか、ハザードマップで最大5メートルの浸水が想定されている場所であり、旧神通川の埋立地でもある場所に立地しており、本施設に被害がなくても、運用する職員がたどり着けないという状況にならないよう、運用ルールなどを定める必要があると思った。また、この施設は、ガラスがふんだんに使用されており、見た目はよいが、大きな地震での安全性に疑問を感じた。

〔村石委員〕

富山県防災危機管理センターは、1000年に一度の降雨による5メートルの浸水を想定し、1階の高さを5メートル以上としていた。ヘリポートは、センターが浸水した場合に物資等を運ぶために使用するとのことだった。備蓄倉庫には、センターで働く職員の3日分の飲食品等が保管されていた。オペレーションルーム（災害対策本部）では、被災現場や防災関係機関を結ぶ画面が設置され、被災状況の早期の把握と的確な指揮命令が円滑に行われるであろうと感じた。

また、1階には、来庁者に対し、防災意識の啓発を図るための映像やパネル展示があったが、本市でも同様の展示が必要と感じた。

〔鋪田委員〕

災害時の防災対応のみならず行政機能を維持する観点からも、耐震・免震構造を持つ庁舎整備の必要性があることが理解できた。災害時に浸水する可能性のない2階以上（一般的な建物としては3階以上の高さ）に庁舎機能を設けながらも、平時には1階部分を県民が活用できる交流ホールとして整備され、開放的なテラスが設けられるなど、普段は防災に関係なく県民が活用することができる工夫がなされており、特定の目的のためではない、ステークホルダーである納税者に開かれた公共施設整備の在り方として必要な視点だと考える。

〔高田委員〕

富山県防災危機管理センターは、災害時の非常時に迅速かつ的確に対応できるよう、防災関係機関が活動する危機管理の中核機能を有する拠点施設である。その中で一番の関心は、オペレーションルームであった。設備として60インチのモニター10台が並び、災害状況等の情報や被災映像が表示され、また関係機関へ配信を行う映像情報システムも導入されており、県民への情報提供が正確に素早く行われるものと期待される。災害はいつ起きるのか分からない。システムがスムーズに運用できるよう、職員の皆様には一日も早い機能の習得を願うものである。

〔赤星委員〕

災害時の非常時に迅速かつ的確に対応できるよう、常設の災害対策本部室や防災関係機関が活動する受援のためのスペースを備えた、防災、危機管理の中核機能を有する拠点施設として頑丈で最新の設備を備えている。災害時ではないときには、研修室として貸し出し、活用されていることを歓迎している。最大限県民に開放してほしい。県庁内保育所があり、子どもたちの居室が、外部からの視線を遮りつつ松川べりの桜並木が見える南側にあることがすてきだと思った。松川に面したテラスを県民がどのように利用できるのか、まだよく分からない点もある。

〔柞山委員〕

これまで常設ではなかった災害対策本部室や災害対策本部員会議室のほか、自衛隊や消防、警察などの広域応援部隊の連絡要員の活動スペース、関係機関の参集や被災状況の情報収集等に有効な屋上ヘリポートの整備、被災現場の情報を収集・分析する映像情報システムの導入など、富山県防災危機管理センターは災害時において、災害応急活動の司令塔機能を果たす施設として、迅速な初動対応や的確な方針決定、関係機関との連携強化が図られ、災害や危機管理事案への対応力が強化された。県民の安心・安全に大いに寄与する施設となり、感心した。

富山市立八尾中学校

(1) 視察事項

- ・統合中学校について

(2) 視察の目的

本市では、人口減少や少子高齢化の進展により、半数以上の小・中学校が標準規模を下回る状況にあり、10年後、15年後に今以上に小規模化していく小・中学校について、将来の子どもたちのためになるのか考える必要がある。

このような中、市教育委員会は将来の子どもたちの学びを保障することなどを目的に、市・保護者・地域が一体となり、将来にわたって持続可能な体制づくりの議論を進めるために「富山市立小・中学校再編計画」を策定した。

統合が実施された八尾中学校を視察し、開校までの取組や今後の課題について理解を深め、今後の委員会活動の参考とするもの。

(3) 取組の概要

生徒数の減少に伴い、平成25年11月に八尾地域自治振興連合会から「八尾中学校と杉原中学校を統合した新たな中学校の早期建設について」の要望書が提出され、平成29年5月には統合校整備の基本計画を策定し、PFI方式で整備することが決まった。その後、校名や制服デザイン、PFI事業者等が決定し、令和2年9月には工事を開始し、令和4年4月に新しく八尾中学校として開校した。

八尾地域ならではの「八尾地域の自然と文化を守り育てる施設」をコンセプトとし、「おわら」を練習する郷土芸能室や特産の八尾和紙等を用いた和室の整備、3つのニワの配置、県内産木材の積極的な使用など温かみのある学校空間をつくり出していた。

登下校時において、スクールバスの発着時間や通学路の安全性などの課題があった。また、令和5年度のコミュニティ・スクールの設置についても、地域学校協働本部と学校運営協議会との体制づくりなどの課題に取り組んでいた。

(4) 所感

〔松井委員長〕

八尾中学校と杉原中学校を統合して新たに八尾中学校が開校された。

開校するまでに学校行事を通して生徒同士の人間関係づくりを行い、統合後の生徒たちの精神的不安を解消する取組をしていた。また、両校の教育目標を基に残すものと新たに追加するものを考慮しながら新しい中学校の教育目標とすることで、異なる学校風土の融合を図っていた。

課題としては、統合に伴うスクールバスとコミュニティバスとの接続に関する課題が開校した後に判明したことや、通学路を変更したことにより自転車通学生徒の自損事故やヒヤリハットが増加していることなどがあった。

〔田辺副委員長〕

すばらしい自然環境の中、広々とした校庭とゆったりとした空間の校舎設計で、生徒が主体的にのびのびと勉学に取り組んでいる雰囲気伝わってきた。生徒たちは授業中静かに勉強しており、おとなしい印象であると説明もあったが、訪問時、生徒のほうから元気よく「こんにちは」と挨拶してくれたことが印象に残っている。

〔金岡委員〕

八尾中学校では、新しい校舎の施設見学と、校長先生から統合中学校としての取組の説明があった。統合中学校であるので、これまでの八尾中学校、杉原中学校の歴史の上に新しい学校をつくっていくという産みの苦しみが感じられた。同窓会組織やコミュニティ・スクールをどうするのかなどの課題に対して教職員の大変さが伝わってきた。生徒の安全対策やスクールバスなど、通学区域が広域である学校ならではの悩みも感じられた。校長先生からは、最近の子どもたちは主体性がないと話があったが、学校の規模が原因なのか、教育の手法が原因なのか、考えていく必要があると感じた。

〔松尾委員〕

旧八尾中学校と旧杉原中学校が統合したが、統合前の準備段階から生徒同士の交流を進め、統合後も校訓、教育目標を掲げて、学校経営方針に基づき進めてこられた。生徒を第一に考えてきた教職員の御苦勞に敬意を表したい。統合したことで大きなメリットがありよかった半面、登下校におけるスクールバスや通学路など、生徒の安全に関わる重要な課題もある。迅速な課題解決のためにも、教育委員会、警察、同窓会、PTA、地域の方々がしっかり話し合い、生徒のために学校運営の力になる必要がある。

〔尾上委員〕

P F I 方式で建設された公共施設はデザイン重視のイメージがあったが、本校は機能性重視で建設されていると感じた。また、正面玄関が分かりにくい、学校にたどり着けないなどの意見があるとのことであったが、概ね、先生方からの機能面での使い勝手の悪さなどの指摘はなかった。しかし、駐輪場は過剰設備だと感じた。

学校統合については、生徒はもちろん、P T Aや地域、同窓会など、クリアしなければならない課題が多い。八尾中学校の場合は2校の統合だったが、これが3校や4校であれば解決に時間を要すると想定されるため、学校規模の適正化を進めるに当たっては、それらも考慮する必要があると感じた。

〔村石委員〕

校長によると、訪問する人から「どこから学校に入ればよいのか分からない」との声を聞くとのことであった。玄関の案内看板が設置されていたが、もっと分かりやすくする工夫が必要だと感じた。体育館ステージは、従来型ではなく収納タイプであり、体育館床面は広く感じた。課題としては、スクールバスの利用生徒が限定されていることや冬の登下校の方法が心配であること、生徒は静かに授業を受けているが、テスト結果などから学力向上を目指す必要があることであった。生徒一人一人の学力が少しでも向上する教育の実践が必要であると感じた。

〔鋪田委員〕

それぞれの地域の特徴や歴史・文化などの背景を持つ学校の統合において、地域の皆さんが合意形成を図られた過程を伺い、時間をかけて議論されてきた御苦勞が理解できた。

校舎にも、生徒らが統合校としての誇りを持って学校生活を送れるような工夫が随所に見られた。特に、八尾地域各地の伝統文化に旧八尾中学校、旧杉原中学校にこだわらず広域的な視点で生徒たちが触れ、自分たちの地域の財産として学べるような仕掛けがあり、ハード整備と授業や課外活動、地域活動といったソフト面が一緒になって新たな可能性を引き出そうとする統合校の今後が楽しみに思えた。

〔高田委員〕

学校敷地内に3種類のゆったりとした「ニワ」が配置され、その他の設備も魅力があり、生徒の皆さんには新しい学校の伝統を育ててもらいたいと期待するものである。校長先生から教育目標等について説明を受けた中で、コミュニティ・スクールの取組において、他の学校では導入されていない地域コーディネーターの配置を検討していると聞いて、八尾中学校の大きな特色になると感じた。気になった点は、自転車通学の生徒による小さな事故が発生しているとのこと。自転車通学の安全教室を実施するなど、事故対策に万全を期してほしいと思った。

〔赤星委員〕

スクールバスが、学校と越中八尾駅間で朝に1便、夕方に2便のみだけの運行で、越中八尾駅からはコミュニティバスに乗換えとのことであった。生徒は駅でどのくらいの待ち時間があるのかなど4月には問合せが殺到したと話があった。結局、保護者の車による送迎が多くなり、駐車場が混雑する問題が起きている。通学に係る生徒や保護者の負担が気になる。

1学期の修了式の日には早く生徒を帰したかったが、コミュニティバスの時間に合わせて行事のスケジュールを調整しなければならないなどの「年に何回か学校が動かなくなる」問題があるとのことだった。ほかにも自転車通学の生徒が田んぼに落ちたり、柱にぶつかったりと、通学に関する問合せも殺到したとのこと、広域での統合に伴う問題は少なくないように感じた。

〔柞山委員〕

本年4月に杉原中学校と八尾中学校が統合し、新八尾中学校が開校され、日も浅く、生徒も先生も新しい学校づくりに戸惑いながら過ごされてきたものと拝察した。それぞれの歴史を踏まえた学校教育目標、校訓、学校経営方針の取組、PTA、同窓会、教育振興会、コミュニティ・スクールを意識した学校評議員会など、組織・システムの再構築等、取り組む課題は多い。また施設面では、来賓や一般来客の玄関が分かりにくいことや、生徒の登下校の安全対策やスクールバスと地域コミュニティバスとの連携など改善の必要がある。地域とも協議され、よりよい学校環境の構築に期待する。

令和4年11月21日（月）
富山県防災危機管理センター



富山市立八尾中学校

